

巻頭言



年頭にあたって

所長 岡田 恒男
OKADA, Tsuneo

教授・助教授・講師それぞれが主催する研究室が約100, 研究部, 共通施設, 事務部の教職員に大学院の学生, ならびに産業界, 外国からの研究員を合わせると1000名に近い大世帯の生産技術研究所の所長をお引き受けして, 研究所の機関誌である月刊「生産研究」の新年号に巻頭言を執筆するのは今回で3回目になります。

2年前, 私は, 今, 工学に求められているものは, 先端技術の開拓と同時に, 先端技術と人間社会の融合を目指した新しい学問分野の創造にあるとし, 都市型の総合工学研究所をめざす私たちの研究所としては, 「これからの10年を, 研究所の今世紀最後のジャンプの10年として, また, 来世紀への新たなステップの10年として位置づけたい。」と将来像を描きました。

1年前, これに応じて第6次将来計画委員会が答申した都市型の大学付置総合工学研究所のイメージを紹介し, その具体化と研究・教育環境の整備・充実を課題として取り上げました。この1年を振り返ってみると, まだまだ, 多くの課題が実現していないことにもどかしさも覚えますが, 同時に, 歩みは鈍くても, 研究所がその方向に一歩ずつ着実に進んでいる実感を覚えるのもまた事実です。

昨年度には, 国際災害軽減工学研究センターが設立され, 徐々に, 新しい研究分野を加えることが出来ました。地震, 洪水などの自然災害による被害の実態を明らかにし, その軽減の工学的手法を国際規模で共同研究しようという構想で, 定員4人の小規模のセンターではありますが, 本所の既存の部門を担当するスタッフがバックアップすることによりそのスコープを広げ, また, 「国際」と名乗る以上外国からスタッフを招きたいと, スリランカより助教授を迎え, 更に1名も海外から人選中です。2年前に開設した寄付研究部門「インフォメーション・フュージョン (リコー)」に引き続き, 「インテリジェント・メカトロニクス (東芝)」および, 「グローブ・エンジニアリング (トヨタ)」の2つの研究部門の寄付を得たのも画期的な出来事でした。いずれも, 本所の学際的な新分野開拓の試みに産業界の賛同を得ることが出来た結果です。将来を見越したテーマであること, 基礎となる分野が本所にあること, 長期在任が可能な適任者が得られること, 産業界の支援が得られること, などを条件として本所の教官が企画した結果が実った例です。

本所の活動は, 基礎的な研究・教育を核とし, これに国際的活動, 産業界との共同, および, 社会人教育の3つのサテライトを配した図式で説明されます。上記はサテライト部分の充実の例とも言えますが, 同時に, 核に求心力がついてきた結果でもあると自負しています。

組織・研究分野の充実にくらべ, 施設整備については今後の努力がまだまだ必要です。幸いにも, 今, 大学の研究・教育施設の老朽化ならびにその整備の必要性に関して世の理解が得られつつあります。老朽化に関して例外ではない本所の施設整備も引き続いて今年最大の重点課題の一つです。

皆様のご支援をお願いし, 年頭にあたっての所感といたします。